

宗教者9条の会・大分

33

●発行：宗教者9条の会・大分 ●〒879-5102 由布市湯布院町川上 3561 見成寺 TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203

私のこと
わすれないでねと
泣きじゃくった
5歳の子ども
それは全ての人の
叫びであったかも

日本国憲法 第9条
日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。



福島の子どもたちの見送り・フェリー乗り場で

チェルノブイリ、そしてフクシマ

河野近子さん

3月11日、私たちが長年危惧し続けてきた原発震災が現実のものになってしまいました。福島第一原発の1号～4号炉が地震と津波によって全電源喪失という事態を招き、燃料の冷却が出来なくなり、メルトダウンという最悪の事態を招くことになったのです。

■チェルノブイリの事故

今から25年前の1986年、旧ソ連の西の端に位置する、ウ

クライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所で、史上最悪の爆発事故が起こりました。その事故により、原子炉の中に蓄積されていた、核分裂生成物（放射能・死の灰）が環境にバラ撒かれ、地球規模の汚染が広まりました。事故の8日後には8000キロも離れた日本にもこの放射能が飛来し、あらゆるものを汚染して人々を不安におとしめたのです。

当時は大地も空気も水も、そして草木も木も川も海も：あらゆるものが汚染され尽くし、その環境から生産された食べ物も汚染されました。野菜・きのこ・牛乳や肉類など殆どの食品が汚染され、母乳からも放射能が検出され授乳中の母親にとつて極めて強いストレスと不安な日々が続いたことを思い起こします。爆発によってまき散らされた放射能による「外部被曝」と、放射能を吸収した食物や、呼吸により体内に取り込んだ

“内部被曝”の二重の被曝が深刻な事態を招いたのです。ウクライナに隣接するヨーロッパでは広範囲で食品や乳製品などが汚染され、多くの国がヨーロッパ産の食品の輸入規制を行いました。日本も1キログラムあたり370ベクレルを越える汚染食品を国内に入れないという、水際作戦をとったことを記憶されている人は多いのかと思います。

■汚染地域の封鎖と被曝による病

当然のことながらチェルノブイリ原発を抱える当事国の旧ソ連では、激烈的な汚染を受けて広大な大地が汚染地域となつてしまいました。チェルノブイリの近傍はもとより、600キロも700キロも離れた地域まで汚染が拡がり、そこに住む600万人もの人は25年経った今も、大地が発する放射能と体内に取り

込まれた放射能によって被曝し続けるということを余儀なくされています。そのような深刻な事態の中で特に激しい汚染を受けた土地に住む40万人は、生まれ育った土地に住むことが許されず、故郷を追われ、避難民となって各地に移住していきましました。一口に40万人と言いますが、ひとり一人、長年その地に住み続けたかけがえのない歴史があり、人の繋がりがあり、文化がある。それらの総てを喪う悲劇に見舞われたということなのです。そして何より気掛かりになるのは、移住対象レベルの汚染を免れた土地に住む何百万人に及ぶ人の低線量被曝による体調不良の問題です。

最も高いレベルになると殆ど即死に近いかたちで全員が死亡します。これらのことを「急性障害」といいますが、「ただちに何らかの被害があるわけではない」とされる、低レベルの被爆の問題は、広島・長崎の被爆者を長年追跡調査することによって明らかになっているように、個人差はあるとはいえ被曝のレベルによって、発がん率があがるというリスクを背負うことになります。

チェルノブイリの事故後、5年目から子どもの甲状腺ガンが激増し、25年過ぎた今も、当時子どもであった人たちの中に甲状腺ガンが多発し続いています。そして白血病が増えているという報告も度々耳にするとともに、様々な病気が多発し、死亡するケースもあり、健康被害は今も絶えなという現実があります。それ以外では、障害を持つて生まれてくる赤ちゃんが増えています。血管系・内分泌系・

免疫系・生殖系・消化器系・泌尿器系・胆汁系などのあらゆる病気で苦しんでいる人が増え続けているのです。ゴメリのある幼稚園の園長は「健康なこどもは2割もいない」と嘆いていました。

原発を推進したいという人たちは、「そのような病気と放射能の因果関係はない」とし、放射能の影響を最小限度に抑さえ込もうとしています。が、チェルノブイリの現地に何度も足を運び、現地の人々の生の声を聞いてきた私には、子どもの甲状腺ガン以外の影響はないとする推進側の説は、とうてい信じられるものではないですね。

推進側が隠したいチェルノブイリの現実、25年経った今、様々な人の努力でその真実が徐々に明らかになつてきつつあります。

* 元ゴメリ医科大学長のバンダジェフスキー博士の著『人体に入った放射線とセシウムの医学的生物学的影响』、チェルノブイリの教訓、セシウム137による内臓の病変と対策』

* アカデミー賞、ドキュメンタリー短編賞受賞『チェルノブイリ・ハート』

など、専門分野の研究や映像による証言などで、次々とその真相が白日の下にさらされはじめているのです。

■ 広島原爆の170倍

チェルノブイリの現状を通して福島事故を見ると、やがて現れて来るであろう将来の姿が見えてきます。政財界に官学・マスコミを支配する原子力マフィア（海外メディアの命名）が、事故は大過なく収束しつつあり、住民も遠からず平常の生活に戻るかのように見せようと画策しています。しかし現実、未だに収束のメドはたつていません。今も劣悪で過酷な労働環境の中で、多くの原発労働者が、破局的な局面を回避する

ための作業をしている現実があります。下請け・孫請け・ひ孫請けなどの原発労働者の問題にふれることなく「おかげで今は小康状態を保っている」とうそぶいています。が、日本が破滅するほどの放射能放出の可能性がなくなったわけではありません。

福島原発がまき散らした放射能は、アメリカなどからも検出されており、地球規模の汚染を拡げています。当然周辺地域の汚染は深刻で、チェルノブイリの強制避難区域に当たる汚染レベルを福島に当てはめれば、その面積は琵琶湖の2倍に相当するといわれています。また、日本の法律に照らせば、人の住めない管理区域にあたる面積は福島県に匹敵する程の広さだといわれています。これまでに放出された福島原発の放射能は、広島原爆の170個分に相当（IAEAへの報告）し、それが拡散されているということになります。

■一刻も早く

脱原発の道を

今後、5年10年と時が経過

する中で、チェルノブイリで起きているような、低線量被爆による、様々な健康被害が現れ、住民を苦しめるであろうことは、想像に難くありません。そして今現在、日本にある54基の原発が稼働し続ける限り、第二の事故が起きる可能性は否定できないのです。狭い国土の日本でさらなる事故が起きたらどうするつもりなのか！一刻も早く総ての原発を停止し、廃炉にむけての手順を踏まなければ間にあいません。

今私たちは、未来を選択するための大切な岐路に立たされています。政財官の強大な力がこぞつて誘導しようとする「経済発展」という錦の御旗をかかげて、日本を破滅に導くような原発推進の社会か、それとも、環境と命を大切にする脱原発の社会かを選

択しなければなりません。私たち今を生きる大人に突きつけられている大きな責任を伴う選択です。

チェルノブイリ原発事故

後、甲状腺の専門医である日本の医師団とチェルノブイリの人たちを結びつける活動をしていた河野近子さんが、旧ロシアやウクライナの議員・医師や被災者をつれて見成寺に現れた。突然の訪問に驚いたが、今彼女が何をしているのかをまのあたりにし、戸惑いを感じた。反原発の運動はしていたが、被災者の支援ということは私の頭にはなかったからだ。その後を今回「チェルノブイリ支援運動・九州」の一員として、何度も現地に足を運び、子どもたちの支援をしてきた河野通子さんに「チェルノブイリとフクシマ」というテーマでご執筆いただきました。(詢)

「福島の子どもたちを湯布院で思いっきり夏休み招待」のご報告



7月の始めであつたであろうか「福島の子どもたちを招待したい、お寺に何人くらい泊まれる?」という電話があつた。6月に講演をお願いした小坂正則さんからの電話だ。「盆明けの18日くらいからなら何とかなるだろう」と答えて、間もない時期に第一回の実行委員会が

開かれた。様々な形で国際交流などをやっている凄いメンバーが集まってきた。参加者の募集はインターネットで行ったとか、すでに50名を超えたので締め切ったと聞いたのが7月12日。その時すでに世話人の何人かで、高崎山自然公園・うみたまご・グリーンコップの会員宅でのホームステイなどの日程が候補に挙げられ、招待の約束を取り付けていた。「ハーモニーランドや耶馬溪の洞門キャンプ場も良いね」という話がこの日に当たった。次の実行委員会では「招待の約束頂きました」と。大分市や由布市の協力もあり、招待の準備はほぼ完了。当初は8月16日、深夜バスを仕立てて大阪からフェリーでという計画であつたが、バスの移動は無理だということで、新幹線に変更。17日早朝、新幹線・郡山駅集合とい

うことに決まった。2名が迎えに行き、帰りは新大阪まで2名で送るということも決定。抽選で3歳から12歳の子ども20名と保護者12名の32名を招待することになった。

お寺をベースに5泊6日という計画にやや不安はあつたが、由布市の後援ということもあり、湯布院観光協会や旅館組合など様々な形の協力要請があり、頂いた提案を幾つもお断りせねば日程が組めないという嬉しい悲鳴も。総ての準備を終え、7泊8日の日程は夢のように過ぎた。

「朝起きて眠りにつくまで、皆様の温かい想いに包まれた1週間でした。このような貴重な体験が出来たのも「おも夏」に参加させていただけたから。感謝！子どもたちが感謝の火を消すことなく、元気に大人になって、社会に恩返ししてくれる

ことを信じています。」というのは参加者の声。私もスタッフも「有り難う」を連発して別れを惜しんだ。

この企画に関する報道も並ではなかった。企画当初にスタッフや募金の呼びかけを3紙が、本番の17日からテレビや新聞など7社が大きく報道した。終了後には全国放送の「とくダネ」という朝の番組で特集。外で元気に遊ぶ子どもたちの笑顔が印象的だった。3月11日地震と津波で東京電力福島第一原発の1号機・4号機が破壊され、大量の放射能が大気中に放出された。臭いもなく目にも見えない放射能、手がかりを得るためには測定器がある。でも大量にそれがあるわけではない。「窓を閉めて部屋の中で過ごす」という窮屈な生活が始まり、今もその生活は変わっていない。食べ物も内部被曝を避けるため遠くから仕入れるなど、苦労は尽きない。仕事を失い住み慣れた土地を離れ、見知らぬ土地で子どもと家に閉じこもる生活は、想像を絶するストレスだと思つた。

参加者は応募で選ばれたこともあり総て初対面、私もスタッフも殆ど初対面の集まり。意見の違いや衝突があつても不思議でない企画であつたが、想い一つであつたと思う。「出来ることを目一杯やりたい」それはどこかに潜む「いたみ」の心でもあつたと思う。募金を寄せてくれた人たちも同じ心であつたと思う。期間中に食事の準備やこどもたちと遊ぶなどのボランティアを含めるとスタッフは100名を超した。医師も看護師もいた。「フクシマはひとごとでない」という謝罪の気持ちもあつたのかと思う。収束までには気の遠くなるほどの長い時間がかかり、それに耐えることを余儀なくされている人は福島の人たちだ。

『絆』という参加者全員のコメントを頂いた。「わすれないでね!」と泣きじやくつた5歳の子どもの姿が目浮かぶ。そんな1週間でした。

日野詢城 記

福島の子どもたちを湯布院でおもいきり！夏休み招待・寄付

法専寺／藤谷知道／蓮照寺／日野詢城／清原えつ子／明尊寺／宮岳文隆／岩尾豊文／津垣慶哉
黒野光治／西藤 真／林 正道／横川香正／菅野俊光／金山道玄／藤井邦麿／安養寺／藤村 暢
三家本稔／石井康司／覚了寺／大江憲成／藤吉文佳／環 文隆・睦美／大在 紀／廣瀬邦照

571,380円（ご協力有り難うございました）

年会費納入・カンパを
よろしくお願いします。

宗教者9条の会 2011 年会費

岩尾豊文／瀬川道信／佐藤福子／小出昭幸／松下和義
三上英範／霊鷲照玄／佐々木淳二／堤 栄三／藤村憲雄
津垣慶哉／日野凡記／渡辺真理／木津英展／立川教洋
日高幸男／吉川 學／小峰恭丸／通覺寺／黒野光治
西藤 真／林 正道／横川香正／菅野俊光／金山道玄
藤井邦麿／安養寺／藤村 暢／三家本稔／石井康司
大江憲成／藤吉文佳／環 文隆・睦美／大在 紀
廣瀬邦照／清原えつ子 2011/09/17 現在

宗教者9条の会・大分事務局

〒879-5102

由布市湯布院町川上 3561 見成寺

TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203

年会費 3,000円

郵便振替口座 01720-1-111731

編集後記

◆ 日本赤十字社やNHKなどの募金がどのように分配されたのか。募金を呼びかける声は大きくても、その後が見えてこない。子どもたちや様々なグループが必死に呼びかけた募金の行方が解らないのは不自然だ。

◆ 阪神淡路の震災時も年末まで1円も個人給付はなかった。年末に「越年資金の貸し出し」をキリスト教の団体が行い、長蛇の列が出来ていたことを思い出す。公共工事はドンドン進んでいく中で、被災者は置いてきぼりになっていったのだ。

◆ 報道も復興・復旧に偏りつつあると思う。グランドの土を10センチ程度削ったから安全だというのは余りにもお粗末。一日も早く子どもたちを外で遊ばせたいという気持ちはわかるが、不安を感じている保護者を排除することにならないのかと危惧する。

◆ 避難先で「放射能がうつる」と虐められた子が1週間後に学校に行けなくなり、再度別な場所に避難したと：悔しそうに語った母親の姿が思い起こされる。

◆ 3・11から半年を過ぎ、被災者への想いが薄れていくのが怖い。「わすれないでね」と泣きじやくつていた子どもの叫びは、被災者全員の声かもしれない。

(詢)